
君がくれた日々よ

冬野空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた日々よ

【Nコード】

N5319V

【作者名】

冬野空

【あらすじ】

港川高2年の北島将平はボクシング部主将。

そんな将平は転校生、芹沢奈美に恋をする！？

不器用な将平とおしとやかだけどちょっぴりドジな奈美の甘い物語
！

君に恋をした。

今年も夏がやってきた。おれは夏が好きではない。

夏といっても、まだ7月の初め頃だ。今からが灼熱地獄だ。

今日もクーラーの効いた自分の部屋を思うと、この授業から抜け出したくなる。

俺は港川高2年の北島将平。今日も何気ない日々をすごしている。

ちなみに、俺は学校が大嫌いだ。好きで行っているやつなんているのか？と、思うくらいである。

俺の席は窓側だから外の景色が良く見える。ふつう、学校の窓から見える景色はグラウンドなのだが、

俺の教室は運よく校門が見えるグラウンドとは反対側の教室だった。だからといって、外ばかり見ているのではない。最近はずっと前を見ている。

俺には好きな人がいる。

ずっと前から好きだった・・・なんてモンじゃない。

最近転向してきた女の子、芹沢奈美さんに心を奪われているのだ。

話したことがないし、それどころか芹沢さんの目も見れないのだ。
いったいどうしたんだ俺!!

これが恋と気づいたのはつい最近の事である。

そうとなったら告白だ!・・・馬鹿なことを考えるな!俺!俺がそんな事できるかよッ!!

そうこうしている内に授業は終わる。

「おい、将平?しょーへー?」

前の席の川原准が顔を覗いてきた。コイツは中学からの友達だ。

「お、おう。何だ?」

「今日の練習なんだが・・・」

ずらずらと、部活の話をし始めた。何でコイツが俺に相談しているかというと、俺は主将、ボクシング部
主将の北島将平だ!

こんなにボくっとしているのに、夏が嫌いなのに、ちょっとイマイチな主将しかも、ボクシング?
だなんて言われても答えようがないので聞かないで欲しい。

「ああ、今日はトレーニングだ。トレーニングルームに集合しろ

と伝えとけ」

トレーニングは嫌いではない。鍛え抜かれた自分の身体に自信があった。

そんなボクシング馬鹿が始めて恋をしたのだ。

花火大会はあの人と。

放課後になった。何人かの生徒は部室に元気よく仲間と一緒に走っていく。また、他の生徒は足早に自宅へ帰っていった。

俺は今、准と学校のはずれにあるトレーニングルームに向かっていた。

「ちい、筋トレかぁ・・・気が進まないな」

隣で大きなため息をつかれた。しつこい奴だ。さっきから同じことを何回も言っている。そんなに嫌なら筋トレしなけりゃいいじゃねーかよ。

「ふう・・・、お前はさ他にしたいこととかないのよ？もう夏だしさ、夏といたらぁ？！」

「夏の大会」

俺の答えを聞いた准は、こりゃダメだわ！と、頭を抱える仕草をした。

「お前なぁ・・・夏といえば！！夏休みい！夏休みといったら夏祭り！そして花火イイ！！」

な、何だそういう感じのか。そうだな・・・去年は練習が詰まってる、休みどころじゃなかったしさ。

夏祭りかぁ・・・何考えてんだぁ！！芹沢さんと、は、花火・・・

最高だ!!

「将平は花火大会来るか？」

「うーん、どうしよっかな？」

俺の意外な答えに驚いたのか、ボクシングは？ボクシングするんじゃないかったの？と、めっちゃ聞いてくる。

「一日だろ？そんなくらいいいんじゃない？」

行く気はなかったのだが、最終的に行くことになってしまった。この流れだと・・・

「なら、俺と行こうぜ！どうせお前誘うやついないじゃん」

ほらみろ、そうなるよね。ってか、誘うやついないとか！何だよそれ！！

「へえー図星ですか？フハハッ！お前に彼女はなあー」

「うるせえ！！お前こそいないんじゃないの？」

驚いた顔だったが、しだいにニヤニヤしてきてキモい。何なんだコイツは！

「そう！俺に彼女なんていない！いませんよーっと。でも俺はお前とは違う！」

「は？何が違うんだ？」

スキップしながら先に行ってしまう。何故スキップしたあ?! 傍から見たら変人極まりない・・・

准に走って追いつくと、准が聞きたい? と、言ってきた。

「俺、好きな娘できちゃった!」

えっ?! 俺は一瞬混乱した。何で混乱したのかは分からない。

「そんでさ、俺、夏休み前までにその娘に告白する」

「そうか・・・頑張れよ! 振られたあゝって、泣いて来るなよ」

「俺を誰だと思ってる?! 振られねーよ」

ずいぶん自信だ。まあ、顔は悪くないと思うけど・・・。ちなみにこの学校の女子の間ではボクシング部が一番人気が高いらしい。つまり、イケメン率が高いのだ!! ふふ、何かうれしい。

いつも練習時には、ボクシング部のファン? らしき女子たちがいつもいる。ファンクラブみたいなのも存在するという人気ぶり。

「まあな」

何かさっきの発言完全にアレだよな・・・ナルシっぽかった・・・。

俺は決して自分のことをカッコイイだなんて思ってもいない。いや、これマジ話だから!!

部室の扉を開けると、汗臭い臭いがプンプンする。男達の熱気がムンムン・・・

「「「ちわーっす!!」」」

部員たちが主将の俺に元気にあいさつ。いつものサイクル。

「お前ら! 気合入れてけよ!!」

「「「うっす!!」」」

あーあー、暑苦しいね。

気に入られちゃってます。

キュ、キュと、ボクシングシューズが床にこすれる音がする。

汗の匂いと、荒い息づかいと気合が聞こえる。

「あ、あちいゝ・筋トレの日に限って30℃超えるんだよなー。
仕組まれた！クソッ！！」

准が何かほざいてる。誰に何を仕組まれたって言うんだ・・・。

しかし、俺も正直言ってクーラーの効いた部屋にダイブしたい！

「しょーがねえよ。グダグダ言ってねーで、ほら」

准に縄跳びを渡した（投げた）

「そおだぜ？いくら鬼主将が立てたメニューだからってさあー」

鈴原爽汰がつっ込んできた。こいつも2年、このボクシング部で出会ったヤツだ。

「鬼主将w」

准が笑い出すとそれを聞いていた部員が次々と笑い出す。

「お、おい！うるせー！」

その時、廊下から「ドドドドド！」と、すごい音が聞こえてきた。

気のせいなのか、だんだん近づいてきているような・・・

「・・・ヤベ、俺外の空気吸ってくる」

「待て待て！！逃がすかよッ！」

准たちが、俺の上に覆いかぶさった。

「はなS「せんぱあゝい！！」・・・」

ドン！と開かれた扉の奥に見たくない人物の顔があった。

「北島先輩？せんぱゝいッ！！」

辺りがざわざわしてきた。

「ははッ！ざまあ、将平！」

准が、ガハハとあざ笑った。このヤロー・・・覚えとけ！

「あっ！北島先輩っ！」

ソイツが俺に駆け寄ってきた。な、なんなんだよ・・・

「園崎・・・」

「先輩！差し入れです！！ハイ！」

その手にははちみつレモンが抱えられていた。

「何だ？何だ？また押しかけかよ・・・」 「主将はモテるよなあ」

ひそひそと、話し声が聞こえた。まったく、意味わからねえこと言
いやがって。

「あのさ、差し入れはありがたいんだけど・・・」

「邪魔・・・ですか？」

はい、邪魔です！メツチャ邪魔にしか見えません。

・・・なんて、言えねーよ。

気に入られちゃってます。(後書き)

みんな聞いてよ!!

3話書いていたら何度もインターネットの接続切れて、これ3回書きました!

ざけんなあ!!!

ファンは怖い。

「え・・・」

なんてこと言っちゃってんだ？園崎美月！？
ええと、なんて言ったらいいか・・・

「困るよ、部活中になんて」

あえて“邪魔”と言わなかった。言ったらメンドくなるだけだしな・
・

気持ちは分かるんだけど、・・・みんながすごい目で見ているから。

「え、あつ・・・すみません！なら、これだけでも！！」

園崎が俺にはちみつレモンを渡して勢い良く出て行った。

再び辺りがざわついた。

園崎美月、俺の後輩にあたる。ボクシング部の噂を聞きつけてやって来たのか、しょっちゅう部に来る。

今日はトレーニングということはボクシング部のファン達は知らない。

ならなぜ、園崎は知っていたのか？・・・情報網の広さ・・・かな？

そんなことはどうでもいい！！練習、練習！

「ほらほら！筋トレ再開！」

まだ話し声が聞こえたが、練習に引き戻した。

「おいおいッ！将平君よう、いきがんなや」

耳打ちをするように、山下竜司が言った。

コイツは嫌なやつだ。一年から共にボクシングをしているが、良いやつだとは思ったことはない。

コイツは嫌味の塊ではないのか？

「・・・・」

山下をギラッと睨みつけた。すると、山下は鼻で笑って自分の筋トレを始めた。

「相手にすんなよ・・・」

准と爽汰が優しく言ってくれた。

「ああ、気にしてねーよ」

嘘。ああーむかつくー！！コンチキショー！！！！

「あ、今日何日？」

何かを思い出したかのように爽汰が聞いてきた。

「7月20日だけど？」

「うおおー！！2日後から夏休みイ！」

爽汰がガッポーズを決めた。そうだ、忘れてた！夏休みの存在！！

よっしゃあー！休みだ！・・・あ、俺達部活あるじゃんか。

「「「・・・休みじゃねえ」」」

あーあ・・・、でも、ボクシングだからいいやW

「祭りいゝ。俺は彼女と行くぞ！」

准が胸を張っていった。・・・まだ予定だろ？予定！

「へえー！お前彼女いるんだ！！やるじゃんかよ！」

「まあな」

嘘つけ、バカ！

・・・彼女・・・か・・・。

作戦会議。

――夏祭りまであと、一週間――

夏休みまであと、5日だ。俺は今パンパねえほど焦っている。

だって、夏休みに入ったら芹沢さんと会えなくなる。夏休みの思い出消滅！

いやだあ、それは避けたい！！

俺は決めた！ この5日で芹沢さんに告白するんだ！！

ようし！ 気合入ってきたぜい

「何、妄想してんの？」

爽快がニヤついた顔で話しかけてきた。

「え？ 妄想？！ してねーよバカ」

「えー、そうか？」

何故だあ！！ 俺の心を読みおったー！

ハイハイ、どうせ図星ですよ・・・、コノヤローが・・・

「つーか、何でお前がこのクラスにいるんだよ？帰れ」

「それ、ヒドー。せつかく遊びに来たんだぜ？」

遊びに来なくてもいい・・・。

「俺は、暇じゃねーんだ。特に放課後！」

「なにそれ？・・・告白？」

なああああー！ー！ー！！！！

「ん？どうしたんだよ、そんな顔して？」

「・・・・・・・・」

「ふーん、まあ！頑張りな！」

爽汰はそう言うのと、のこのこと教室を出て行った。

うーん・・・俺は気持ちが顔に出るタイプなんだ！そうなんだ！！

「よし、そうとなったら今日の放課後だ！！」

授業中は告白のプランを立てて過ごした。

今日の放課後にキメてやる！！

この想い、分かりますか？

俺、君に恋をしました。もっと、君の事が知りたいです。この気持ち受け取ってくださいますか？

・・・キンチョーする！身体がうまく動いてくれない。

しょうがない。だってこれが恋なんだから。

「うう・・・一步踏み出すんだ俺！しっかりしろ！」

教室の隅で小声で自分を励ました。

今は放課後、生徒がだんだん教室からいなくなってきた頃だ。

いくぞ、俺はやってやる！男を見せるぜ！

芹沢さんは予想通りまだ教室にいる。芹沢さんは放課後は本を読んでいるのだ。

「・・・あ、あの」

やった、声をかけれた。

「え?・・・北島君?」

俺が声をかけたことに驚いたようだ。一度も話したことがない奴が声かけてきたんだ、驚くのは当然だ。

「話があるんだ。時間いいかな?」

「話?・・・うん、大丈夫だよ」

・・・心臓が

俺たちは教室を出て人通りの少ない端の廊下に来た。

「ねえ、北島君、部活はいいの?」

意外と最初に口を割ったのは芹沢さんだった。

「あ、ああ。・・・ところで、話なんだけんだけど・・・」

北島将平! いざ、参る!

「大切な話なんだ。俺は本気だから」

「・・・?」

「あの、俺・・・さ、芹沢さん・・・」

頑張れ！俺エエ！！

「俺！！君のことが・・・芹沢さんのことが！好きなんだ！！」

「・・・え？な、何言って・・・」

「俺、芹沢さんに恋をしました。もっと、芹沢さんのことが知りたい。」

芹沢さんは少し困った顔。今の俺は、どんな顔をしてるんだろう？きっと、酷い顔なんだろうな。

芹沢さんの答えがどうであろうと、当たって砕けろだ。もう、覚悟は決めている。

「・・・なんで？何で私なの？」

ああ・・・そうだね、俺なんか・・・

「なんで、私なんかでいいの？・・・北島君にはもっと「何言ってるんだ」・・・」

「俺は、芹沢さんじゃなきゃ・・・ダメなんだ／＼」

沈黙。どれほどの時間が経ったのだろうか？俺は恥ずかしくて、ずっと下を向いていた。

おそらく、芹沢さんも同じだろう。

すると、バタバタと足音が近づいてくる音がする。

「おい！何してんだよ！？部活サボってんじゃねーよ！」

その足音の主は准だった。何か、機嫌が悪い。

「・・・？芹沢さんじゃん？！将平どうした？」

「／／何もねえよ」

やべえ、正面向けねえよ・・・

「お、俺今日はパスな・・・じゃあ」

足早にその場を離れた。いられなかった。俺、今逃げた？

まあ、告白できたんだ。胸張れ！答えは良く分かんなかったけど、そのうち分かんと思う。

顔が焼けるほど熱い。心臓は未だ破裂寸前。

君は俺のこの想い受け取ってくれたのだろうか？

この想い、分かりますか？（後書き）

皆様！お久し振りですへへ

ようやく、将平君がコクりましたあ！！イエーイ！

ここから甘いストーリーを展開したいと思います！

これからも妄想にお付き合いくださいませ！！！！

恋の病。

「はぁ〜・・・」

嬉しいんだけど、ため息が出てしまった。きっと、恥ずかしいからだ。

俺は今まで、自分の想いをそのまま素直に相手に伝えたことなんてなかった。

思いを伝えようとすると、何かに包まれたような言葉しかいえなかった。

何ていうのかな？

何かに包んだ想いは相手に届きにくい。

だから、なんとなく恥ずかしい。素直な思いを芹沢さんに伝えられたから。

「俺、やればできるじゃんかよ」

今日の朝は爽やかな朝だ。何とも言えないすがすがしさ！

俺は朝からテンションMAX！

「よう！将平！ん？お前どうした！？」

准も俺のテンションの高さに気づいたか！ふふ、今日の俺は一味違うぞ。

「よっす！今日の俺どうよ？」

「・・・大丈夫か？」

失礼な奴だ。まあ、いっか！

「世間様は『夏休みまであと6日！』だなんて騒いでるよな」

「そうそう！まったく、暢気な連中だ」

と、言いながらも内心、夏休みが楽しみでならなかった。だって、デートなんだから。

もちろん、芹沢さんにデートの話なんてしてない。

だから、俺がデートに誘うんだ！！

「だよなあ」

教室に入ると、芹沢さんが席に座っているのが見えた。

「おはよう」

勇気を出して言ってみた。

「おはよう、北島君」

芹沢さんはニコツとほほ笑んでくれた。俺は安心した。

俺が席に座ると准が来た。

「なになに？将平って、芹沢さんと親しかったっけ？」

いかにも興味津々って顔で聞いてくる。今は准に教えられないな。

「別に？」

チャイムが鳴ったので、准は不満な表情で自分の席に帰っていった。

今日は部活に行った。さすがに2日連続はまずい。

精神統一して練習したが身に入らなかった。

そんな俺の様子に気がついたのか、何人かが俺に事情を聞こうとしてきたが、全部ごまかした。

家に帰ると、ベッドで横になった。

それから色々考えた。その末、結果は得られなかった。

「お兄ちゃん！ご飯できてるよ！早く！！」

2つ年下の妹の声がした。飯か・・・食べる気にならない。

俺の中で何かが葛藤していた。そのため落ち着かないし、イライラしている。

翌朝、教室へ入ると、なぜかそのイライラは無くなった。

・・・これはなんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5319v/>

君がくれた日々よ

2011年10月9日13時34分発行